

さくら荘と河合荘な僕らの宴

チャッピー4510

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スイコーの文化祭で偶然出会った河合荘とさくら荘の住人達、彼らの宴が今始まる！

大好きな二つの作品のクロスオーバーがなかったので自分で書いてみました。よろしくお願ひします！

目次

| | | |
|----------|----------|----|
| さくら荘side | はじまり | 1 |
| 河合荘side | よろしく | 8 |
| さくら荘side | はじめまして | 13 |
| 河合荘side | 違うんだ! | 17 |
| さくら荘side | おたから | 21 |
| 食前の騒ぎ | さくら荘side | 26 |

さくら荘 side はじまり

スイコー祭で無事「銀河猫ニャボロン」の披露を終えた俺はさくら荘の103号室で生ける屍となっていた。

ニャボロン製作によつて3日連続の徹夜、それに加えて多くの観客の前でさくら荘みんなで作ったゲームを披露した時の緊張と疲労が一気に押し寄せて来た。

「ははは…これが勤労の痛みなのか…」

そんな乾いた笑い声が自身の口から漏れてさらに疲れが増した気がした。

これからゆっくりと瞼を閉じてこの3日間取れなかった睡眠を心置きなく堪能しようと思つたが、それを許さない宇宙人がベランダから舞い降りて来た。

「グッドモーニングだよ…こーはいくん！私たちの輝かしい朝がやってきたぞ！」

俺が住むさくら荘の201号室住人、上井草美咲だ。個人でアニメ製作を行なっており、その才能は業界の人々が一目置いている。美人でスレンダーで、見た目は芸能人にだって負けていない自慢の先輩である。

しかし、そんな才能のある人間だからこそ欠点もあるのだと俺は思ひ知らされる。上井草美咲は俺たちが通っている水明美術高校の中で一番有名な問題児だ。

一年の頃には運動場に大きなミステリーサークルを描いたり、校舎裏に奇跡の壁画を描いたり、理科室の人体模型がヴィーナスになっていたり…

その犯人がこの変人、上井草美咲なのだ。

「美咲先輩、今は午後の5時ですよ？輝かしい朝どころか日が沈み始めている時間です」

「なにを言っているんだこーはいくん！太陽はいつだって私たちの上にあるんだよ！30秒もすればピッカピカに照らしてくれるよ！」

「太陽がそんな動きしたら天変地異の前触れですよ！太陽だって疲れ

てるんだから休ませてあげてください！」

「よし、ならば太陽君には休んでもらってこーはいくんには起きてもらおう！さあグッドモーニングだよこーはいくん！私たちの輝かしい朝がやってきたんだよ！」

「だから美咲先輩…今は五時ですから…ニャボロンも終わったんですし少しは寝かせて…」

「なにを言っているんだこーはいくん！太陽はいつだって私たちの上にあるんだよ！30秒もすればピツカピカに照らしてくれるよ！」

「おかしいな!?その台詞さつき聞いたことある気がするんだが！」

「全く、寝ぼけてないでさつきと起きるんだもーん！ほらズボンも脱いで、洋服も！今日は打ち上げで外食だぞー！」

美咲先輩はそう言っただけで俺のズボンに手をかけ力任せに引つ張り始めた。何故ここで服からではなくズボンから引つ張るのか、健全な男子高校生に女子高校生がやっついていいことではない。

「ちよつ、先輩ストップ！」

「急げこーはいくん！誰も待つちゃくれないぜ！」

俺の抵抗も虚しく宇宙人にズボンを脱がされてしまった。

パンツと一緒に。

「変態」

「脱がしたのはあんただあぁ！」

なんとか美咲先輩からズボンを取り返し部屋から追い出した後、俺は大人しく外に出かける格好に着替えた。

着替えている途中にドタバタと隣の部屋から聞こえる。

何事かと廊下に顔を出すと黒髪ロングの少年が俺の部屋に入ってきた。

「か、神田！助けて！」

入ってきたのは102号室の住人、赤坂龍之介だ。高校二年生にして天才プログラマー、ゲーム業界では知らない人はおらず、「銀河猫ニャボロン」でもプログラミングをしたのは赤坂だ。

「どうしたんだよ赤坂、今日は珍しく騒がしいな」

普段は部屋に引きこもって、学校の授業にも出ず、会社相手にゲー

△製作の仕事を行なっているこいつが今日はやけに騒がしかった。
「どうしたもこうしたも、何故あの居候娘がまださくら荘にいるんだ
！」

そう言つて赤坂が指差した先を見ると金髪の美女がそこに立って
いた。

リタ。さくら荘に住んでいる帰国子女の友達だ。

つい先日からさくら荘に泊まりに来て帰国子女を連れ帰ろうとし
ていたのだが、本人の説得により本国イギリスに返すのを諦めたらし
い。

空港で見送つたはずなのになんでまだここにいるのだろうか？

「リタ、イギリスに帰つたんじゃなかったのか？」

「はい、そのつもりだったんですけど美咲に打ち上げをするからリッ
タンもおいでよ、と言われて引き返してきました。親には連絡済みで
す」

「泊まるところは大丈夫なのか？」

「はい、今日は龍之介の部屋に泊めてもらいます」

「僕はそんなこと許可した覚えはないぞ！」

「では今許可をいただけないかと…」

「誰がそんな許可ですか！」

「普通私みたいな超美少女と同じ部屋で寝れるとなつたら靴を舐める
勢いで承諾するものですけど…」

「そんな考えを持つてる時点で危険だと言っている！そもそも女と一
緒の部屋でなんて寝れるか！なにをされるかわかつたもんじやない
！」

二人の夫婦漫才を見てると何故かほっこりするのだが、いい加減俺
の部屋でやらないでほしいので声をかけようとした。すると、また部
屋に別の住人がやってきた。

「空太」

「ん？なんだ椎名」

椎名ましろ、202号室の住人で元世界的に有名な画家だった。か
つてはイギリスにおり、リタと同じアトリエに通っていたらしいが日

本の漫画に感銘を受けて自身も漫画家になろうと思い日本に来たらしい。見た感じ、とても儂げでどこか不思議な雰囲気のある美少女。違和感を覚えるほどの可愛さだ。

さくら荘の監督教師である千尋先生の姪っ子でもあって、スイコーへの入学はスムーズだったのだが：やはり天才には何かしら欠点があるようで、椎名にも変人としての才能があった。

生活破綻者。片付けは出来ず、掃除は出来ず、料理も洗濯も買い物も着替えすらも一人では出来ない。

コンビニではレジで会計をする前にバームクーヘンを食べちゃうし、パンツは男子である俺に選ばせるし、髪を乾かさずTシャツ一枚羽織っただけで身体は濡れたまま俺の部屋に来るしで…

そんな椎名の生活補助を任されたのが、ましろ当番である俺なのだ。

「美咲が、着替えろって…」

「ああ、そうだな。外に出かけるらしいからちゃんとした服着ろよ?」

「空太が選んで」

「は?」

「空太は選んで」

「一体何を?」

「空太と選んで」

「椎名とか?服を?」

「パンツよ」

「ぶふっ!」

「汚いわ空太」

「お前が変なこと言うからだ!」

「変じゃないわ」

「ほほう?じゃあどこらへんが変じゃないのか言ってもらおうか!?!」

「…さては空太、わからないのね?」

「わかりたくないな!そんなこと!」

「もう…何やってるのましろ」

そう言つて椎名の後ろからまた他の誰かが声を出した。
ヒョコつと出した人物の特徴的なポニーテールが楽しげに揺れて
いる。

青山七海、同級生でクラスメイト、親の反対を振り切つてスイコー
には通つているようでバイトと声優の育成所を掛け持ちしながら
日々頑張つている努力家だ。

「七海」

「青山：頼みがある」

「ど、どうしたの神田君：そんな真剣な顔して…」

そりや真剣にもなるだろう。俺は健全な男子高校生なのだ。同級
生の女子のパンツを選ぶなんて大役、男の俺には背負いきれない。な
んとか青山にその役を押し付けようと思つと、俺より先に椎名が口を
開いた。

「空太がパンツを選んで欲しいそうよ」

「神田君!!?」

「何言つてんだお前はああ!」

いきなり椎名が身に覚えのない爆弾を放り投げた。

「私も空太に選んでもらうわ」

「かかかか神田君!?!?」

「違う! 椎名が勝手に言つてるだけだ! わかるだろ青山?」

「そんな女の子に自分の下着を決めてもらうような変態の考えること
なんてわからへん!」

「だから違つてえ!」

俺の必死の訴えによつてなんとか青山の誤解を解き、ついでに椎名
の服装も頼んでおいた。

皆が支度を終わるときくら荘にいる住人の最後の一人がやつと出
てきた。

「なんだ空太、やたら疲れてるな」

「そりやそうですよ…ニャボロンで疲れてるつてのに美咲先輩に叩き
起こされて赤坂とりタも部屋にやつてきて、椎名に爆弾落とされて青
山の説教くらつて…」

「なんだ、いつも通りじゃないか」

「これがいつも通りってよく考えたらおかしいですよね!?!?」

「まあ空太もさくら荘の住人ってことだろ?」

飄々とした様子でそう答えるのが恐らく高校生界で一番マハラジャの男、三鷹仁だ。

美咲先輩の幼馴染でシナリオライターでもあるのだが、本人の端正なルックスとスマートな性格で女性から相当モテているようで…現在6股、朝帰りなんてもう日常となっている。

「それで仁さん、何食べに行くんですか?」

「ん?美咲から聞いてないのか?」

聞いてないどころか会話が成立した覚えすらない。

「行くぞこーはいくん!さあ乗りたまえ!りつたんとドラゴンは千尋ちゃんに送ってもらってね!」

「え、美咲先輩せめてどこに行くか…」

「うるさいわよ神田、ほら早く乗っちゃいなさい。遅くなったら面倒じゃない」

そう言つて未だに独身、可愛そうな千尋先生が俺の頭を掴み美咲先輩が乗っている車に突っ込んだ。

「ちよつ、生徒をもつと大事に扱えないのかあんたは!?!?」

「神田なんて雑に扱っても足りないくらいよ」

「教師の発言じゃないな!?!?」

「いいから行くぞ!こーはいくん、ほらなみんなもましろんも乗った乗ったあ!」

美咲先輩がクラクションを鳴らして早く乗れと急かしてくる。それをいなすように青山が乗車してくる。

「ちよつ、上井草先輩!近所迷惑ですよ!」

「うるさいわ美咲…」

「ほら、ましろ。ちゃんとシートベルト」

「七海お願いね」

「そういえばまだ行き先を聞いてないんですけど…」

「ふっふっふつ…楽しみに待ってるといいよこーはいくん!今日の打

ち上げはいつも一味違うだもーん！」

やはりこの宇宙人とは会話が成り立たないらしい。

俺は日が暮れ始めた空を見ながら諦めたようにため息をついた。

河合荘 side よろしく

夏の終わり、少しずつ涼しくなってくる。縁側で汗を流しながら先輩から借りた本を読んでいたが、今じゃいいぐらいの気温でより本の内容が頭の中に入ってきてやすい。

早く先輩が帰ってこないかとソワソワしていると酔っ払いが庭で何かしているのが見えた。

「っーかーれーたー!」

黙っていれば美人でスレンダーな体型が目立つ女性なのに性格と男運の悪さで未だに独身の麻弓さん…絡まれたら面倒なのでひっそりと自分の部屋に向かおうしたが、足が襖に当たり音を立ててしまった。

「…何処へ行くつもりだ? うさぎ?」

振り向くと一升瓶片手に涙目の麻弓さんが立っていた。

「えーと…ちよつと本を置きに行こうかなーって…」

「嘘つけ、逃げようとしたらこの野郎…」

必死に言い訳を探したがすぐにバレてしまった。それが余計に反感を買ってしまったのだろうか、麻弓さんの負のオーラがさらに濃くなっている。

「こんのクソ童貞が…りっちゃんから借りた本で自分の子供とよろしくしてんのか! 残念でした、その本が官能小説じゃない限りいくら匂いを嗅いでも本屋の匂いしかしないからな」

「残念なのはアンタの思考だろ!」

酷い下ネタをぶち込んでくるのもこの人の性格の悪さがあっただろう。

「もー麻弓さんだったら、いくら会社のお局さんの結婚報告があったらうさぎ君にあたつちや余計に惨めさが増すよ?」

「んっだど彩花デメエ!?!?」

麻弓さんを挑発するように喋るのが彩花さん。男性を手玉にとるのが上手すぎる大学生なのだが、彼女は色々と外でやっているらしく真弓さんから聞いた話じゃ既に両手で数えきれない程のサークルを

潰してしまつたらしい。

いつも麻弓さんや俺を弄っていて、つい最近まで弱点らしい弱点もなかった。しかし、俺はひよんなことがきつかけで彩花さんの弱みを握ることができたのだが、その逆に、俺の弱みも握られてしまった。「だってえ麻弓さんさつきから一升瓶片手に未来ある若者にちよつかいかけてる酔っ払った中年オヤジとやってること一緒なんだもん：彩花、見てるだけで涙が溢れちゃう（笑）」

「その涙で分厚い彩花マスクが全部洗い流される！」

彩花さんは実は相当メイクをしており、一度だけ素顔を見たことがあるが：それを見たとき俺は、日本が世界で一番進んでいる技術はメイクだと知った。

「マスク言うなし」

「おいうさ、ヤスリと漂白剤もってこい。こいつのマスク改め彩花仮面を削り取るぞ」

二人はそんなことを言いながらいつものように追いかけてこを始めた。

俺は本に夢中のフリをして聞かなかつたことにする。するとニョロっと横から顔が飛び出してきた。

「何読んでるのうさ君？」

「うわあああああ！」

「おおうつ、姿を現しただけなのにドン引きされるのって結構興奮するね！」

気持ち悪い登場をしてきたのがシロさん。

この河合荘で確実に一番の変態であり変人で、俺とは襖一枚向かいの同居人だ。

「いきなり現れないで下さい！」

「だからゆっくりニョロっと現れたのに：ダメだった？」

「わざとか!?？」

「それにしても麻弓さん荒れてるなね：なんかあったの？」

「それが：お局さんが結婚したらしくて」

「ああそれで：」

つい俺もシロさんも哀れみみの視線を麻弓さんに向ける。すると一升瓶がシロさんの顔面に突き刺さった。

「重い一撃ありがとうございますっ！」

シロさんは幸せそうに倒れた。

「お前ら二人して私に哀れみの視線向けやがって：初体験経験してる分お前みたいなの売れ残り確定のチエリーよりはいい思い出あるんだからな！」

「勝手に売れ残り決定しないで下さい！俺にはまだ未来があるんです！」

「りっちゃんとの？」

「そそそそそれはっ」

「ただいまー」

彩花さんが茶化しに入った瞬間先輩の声が玄関から聞こえてさらに焦ってしまった。その様子を見て彩花さんはニヤニヤと笑い、麻弓さんは怨霊になり、シロさんは：麻弓さんの肘置きになっていた。

「お、おかえりっす先輩」

「ん、ただいまうさ君」

河合律、高校二年生で俺と同じ学校に通っている。一目見たときからこの人には惚れていて、変人集まる河合荘に入る理由も先輩がいたからだ。

本が好きで友達がほとんどおらず、大人しいのだが、時に頑固で顔を真っ赤にした時はとてつもなく可愛い。

この河合荘は先輩の祖父がもともと管理していたが、今はその妹である住子さんが管理している。

「りっちゃん聞いてくれよう」

「うっ、麻弓さんまた飲んでる」

「うさの奴がいじめるんだ」

「なっ!?？麻弓さん！」

事実無根だと言おうと身を乗り出したが、先輩は可愛く首を傾げた。

「？麻弓さんがうさ君を、じゃなくて？」

日頃の麻弓さんの行動が原因で俺は疑われることがなかった。あれがどう！麻弓さん！

「おいうさ、今私が腹立つこと考えただろ？」

「くっ、間に合えシロさんバリアー！」

麻弓さんが飛ばしてくる負のオーラをシロさんを盾にして防ぐ。ここ数日で俺が身を守るために覚えた新技だ。

俺は身を守れてシロさんは折檻を受ける。両者 win-win の技だ。

「はあ…住子さんにお水もらってくる」

先輩が呆れたようにその場を立ち去ろうとすると、住子さんの方からコップ一杯のお水をもってやってきた。

「はい麻弓ちゃん、お水」

「住子さくん、やっぱり私の味方は住子さんだけだよー」

麻弓さんが変なテンションに入って住子さんに抱きついていく。それを住子さんが優しく撫でながらゆっくりと剥がしていく。

「ほら麻弓ちゃん、今日はお客さんが来るからしつかりしなさい」

「え？お客さんがくるんすか？」

そんなことは一言も聞いてなかったのでつい驚いてしまった。何よりこの河合荘にお客さんと呼んで大丈夫なのか、という心配がある。

「ええ、ほら今日うさ君達の隣の学校の文化祭行ったでしょ？そこで知り合ったの」

今日知り合ったばかりの人をお客さんとしてもてなすのは心配だったが住子さんが言うならきつと大丈夫なのだろう。

「どうやらシロ君見て寄ってきたらしくて…とても明るい子だったわ」

「俺の安心を返して下さいー！」

今日のシロさんは麻弓さんが見た目がイライラするという理不尽な理由で紙袋を頭に被った状態で文化祭に行っていた筈だ。そんなシロさんに話しかけるなんて警察か先生、または同じ変人しかありえない。

ピンポーン

河合荘の玄関からチャイムが鳴った。

住子さんとシロさん以外がゴクリと唾を飲む。

「お、おいうさ、行ってこいよ」

「ま、麻弓さんこそ。いい男性がいるかもしれないよ……」

「私は嫌だぞ……シロに話しかけたやつとつるんでる時点でそいつは危ないやつだ！」

「俺のせいで飛び火食らってる人への罪悪感でゾクゾクするね！これって新しいジャンルなんじゃないかな……」

シロさんの発言を無視して僕達はお互いに行けとアイコンタクトをする。そこで先輩と目が合ってしまった。

「うさ君……」

「い、いや行きませんよ……変処理なんてもう……」

「ううっ……」

先輩は涙目で上目遣いで行きたくないと俺に訴えてくる。ああズルイ、そんな目で見られたら断れない。何よりこれを計算ではなく素でやっているのだから余計にズルイ。

「や、やってやりますよー！」

俺は腹をくくって勢い任せに玄関に向かった。

扉の先には何名かのシルエツトが見え扉に手をかけた時手汗でぐっしよりしていた。

そこで深く深呼吸してもう一度腹をくくり勢いよく扉を開けた。

「い、いらっしやいい!!?」

「よろしくだぞーんー！」

思いもよらない事に、俺たちのファーストコンタクトは宇宙人のジャンピングラリアットだった。

さくら荘 side はじめまして

美咲先輩が車を走らせて15分程経つと、車はある家の前で泊まった。

「お屋敷…？ま、まさか料亭ですか？！」

見るからに雰囲気のある和式の館は風情があり、年月が経っているのがわかる。

料亭で食事なんてした事ないし…お金が大丈夫か不安になり財布を確かめると仁さんがそれをみて笑った。

「落ち着けよ空太。料亭なんて行けるわけないだろ？美咲がいるんだ、そんなところ行ったら大迷惑になる」

「そ、そうですよね」

少しホツとした。ここ最近はず椎名のバームクーヘン代で財布が地味にダメージを受けていたため、ここで高い料理など食べられるはずもなかったからだ。

「ん…？それじゃあなんでここで止まったんですか？」

俺がそう聞くと仁さんが看板…ではなく表札の方を指差した。

「河合荘…ま、まさか？！」

「そのまさかだ」

仁さんは呆れたように河合荘の玄関に足を進める。人様の家にある美咲先輩を連れて行くと言うことは大迷惑をかけるかもしれないと言う事だ。

後から車から降りてきた青山と椎名もよく分かっていない様子だ。

「か、神田くん…どこどこ？」

「空太、バームクーヘンは？」

俺は仁さんが先程していたように表札に指をさして青山達に教える。

「な、何考えとるん先輩達は！」

「うん、俺もそう思ったよ…」

「空太、バームクーヘン」

椎名もお腹が空いているらしく、先程からバームクーヘンをねだつ

てくる。

「椎名、今はバームクーヘンはないんだ。とりあえず、美咲先輩達が何をやらかすか確かめてからな」

「わかったわ」

「よし」

「つまり、美咲と仁をストーキングすればいいのね」

「言い方があれだが半分は当たってる」

椎名はさつきと河合荘の玄関へ向かってしまった。青山は未だに不安そうにしている。

「な、なあ神田君、大丈夫なん？ここももしかして学生寮みたいなどころなんや…」

「関西弁出てるぞ青山…まあ何があるかわかんないけど…とりあえず行ってみよう、責任は仁さんにとってもらって」

「何してんのよ早く入りなさい」

俺たちが意思を固めようとしていると、千尋先生が俺を蹴飛ばして門の中に入ってしまった。

「ちよっ、何するんですか!!」

「あんたらがずつと門の前でイチヤイチャしてて邪魔だったからどかしたのよ。アポはちゃん取ってるらしいから堂々と入んなさいよ」

「アポ取ってるの初耳なんですが!!」

「一々細かいわね…あんたのケツの穴はどれだけ小さいのよ」

「女の人がケツの穴の話とかやめてもらえませんかね！」

「ほら、そんなこと言っていると上井草が挨拶済ませちゃうわよ」

「へ？」

先生が指差した先にはすでにインターフォンを鳴らしている美咲先輩の姿があった。

大丈夫なのだろうかと固唾を呑んでじつと待っていると、扉の先に誰かのシルエットが浮かんだ。

それを確認すると、美咲先輩が突然後ろに下がり始めた。何をするのかといやな予感がして止めようとする、扉が開いた。

「い、いらっしやい!!?」

「よろしくだどーん！」

扉を開いたのは高校生の男子に見えたが、助走をつけた美咲先輩のジャンピンググラリアットによってすぐに姿を消した。

「おい、馬鹿！美咲、やりすぎだ今の」

「テへ☆」

「テへ☆、で済むレベルじゃなかったですよ美咲先輩!!？」

「ならば後輩君も受けるがいい！ジャンピングスラッシュャーシャキーン！」

「ぐえっ!!？」

何故か俺まで攻撃を受ける羽目になった。

「はっ！俺は一体……」

どうやら美咲先輩に仕留められた少年が目を覚ましたようだ。

「だ、大丈夫うさ君？」

仕留められた少年に女子が一名近寄って行く。ショートヘアで大人しそうな雰囲気の子だ。

「せ、先輩!!？俺は一体」

「安心したまえ少年！私は手加減した！」

そういう問題では無いと思う。

美咲先輩はシャキーンと言いながらボルトのポーズを取っている。変人扱い決定だ。

「こんばんは、今日はお世話になります三鷹仁です」

仁さんは何も無かったかのように挨拶を進めている。あの人よくこの状況で普通でいられるなあ……

「さあ！君達の名前はなんて言うんだい？教えておくれよ！」

「美咲先輩、そんなにいきなり絡んだら混乱しちやいますよ」

ショートヘアの美少女と美咲先輩に倒された少年にグイグイ詰め寄るを無理やり引つ張り剥がした。

「え、えーと、俺うさつて言います。高1つす」

「河合律……高2」

二人はそう名乗ってくれた。

「おおく！うさぴよんにりつたんだね！あれ？けどりつたんだと被つ

「ちやうな…よし！りっちゃんにしよう！」

「え、それはその…」

美咲先輩の急な名付けにどうしていいか分からない河合先輩はあたふたとしている。これは助け舟を出した方が良さそうだ。

「ちよつと、美咲先輩…これ以上この人達を困らせちゃダメですつて！そもそもなんでここに来たんですか？」

「こーはいくん！私、食パンは耳から食べる派なんだ！」

「せめて会話して貰えませんか!?!？」

「そんなん決まつてるもん！今日は”ニャボロン大成功、お疲れアーンド〇〇荘交流鍋パーティーをするぞー！おー！」

突然の鍋パーティー開催宣告をされ、俺は宇宙人と会話するのをやめた。

河合荘 side 違うんだ!

突如河合荘を訪れたのは、水明技術高校の学生寮の一つ、”さくら荘”に住む学生さんだった。

「いつの間にこんなの計画してたんですか?」

さくら荘の住人の一人、神田先輩が出会いがしらにラリアットを決めて来た上井草先輩に聞いている。

「ふっふーん♪聞いて喜ぶがいいよこーはいくん!なんと河合荘にいるみんなは”銀河猫ニヤボロン”に来てくれてたんだもーん!」

「え!?ほ、本当ですか!??」

「あー、今日行った学園祭でやってたゲームのこと?あれ凄かったよな」

「うんうん、彩花、ゲームのことよくわかんないけど、高校生なのにあんなゲーム作れるなんて尊敬しちやなく」

麻弓さんがそう答えて、彩花さんがゲームを褒めると神田先輩がもじもじと始めた。

「お、こーはいくん照れてるな?私も嬉しいぞ!直に感想聞けると私の嬉しいセンサーがビンビンに反応してるもーん!」

「え!??あれって先輩達が作ったんですか?」

俺は驚いてついそう聞いてしまった。

「そうだな、脚本は俺、プログラムは龍之介で声優が青山さん、美咲にましろちゃん、リタさんがアニメイラストをやって、ディレクターとしてみんなを纏めたのが空太だ」

メガネをかけたイケメンの三鷹先輩がわざわざ説明してくれたのだが、この先輩、何故か服の襟にキスマークがついている。そういう柄なのだろうか?

「ん?これは本物だよ?」

視線がそこに向かっていたのに気づいたのか三鷹先輩は笑顔で答えてくれた。…え、本物?

「けど何処で知り合ってたんですか?会場いっぱいにお客さん来てましたけどお客さんに関わるようなことなかったと思うんですけど…」

「私もー、今日客が来るって知らなかったしこいつらとも会ったことないぞ?」

ポニーテールが特徴的な青山先輩が思案顔でそう聞くと麻弓さんもそれに手を上げた。

そして、それに答えたのが意外にもシロさんだった。

「えーと…ちよつと恥ずかしい話になるんだけどね」

「はい」

「警備さんに職質受けちゃって、そこに美咲ちゃんが話しかけて来てくれたんだよ」

「シロさんスイコーでも職質受けてたんすか!?!?」

なんとというか、意外というかむしろしっくりくる理由だった。

「その後に住子さんが迎えに来てくれてね」

「巻き込まれるのは嫌だったもの、うふふふ」

住子さんも何気に酷い事を言っている。

「いやあ、ほんとありがとね美咲ちゃん。何故か警備のおじさんが美咲ちゃんをみて逃げるように何処か行っちゃってさ」

シロさんの流石の変態っぷりもアレだが、上井草先輩の変人度は警備員すら遠のけてしまうらしい。

「シロろんなんか紙袋被ってて面白かったから声かけてみたんだもん!」

理由も類を探していた変人だ。

「空太、ご飯」

「ん?ああ、そういえばそうだったな…あまりの衝撃で腹の虫も鳴きやんで忘れてたわ」

「私は忘れてないわ」

「椎名は食いしん坊だな」

「今日はピンクよ」

「誰がパンツの色を覚えていろと言った!?!?」

神田先輩となにやら漫才をしているのが椎名先輩だ。まるで人形のような人だが何処か抜けている節もある。神田先輩の彼女なんだろうか?

「神田先輩、神田先輩」

「ん？あー…えつとうさ君だったか？」

「どうかしたのか？」

「神田先輩と椎名先輩って付き合ってるんですか？」

「な！？お前何を！」

聞いていてふと気付いてしまったのだが、こんな話をして麻弓さんが反応しないだろうかとチラと後ろを見るとマリーちゃんを抱いてにこやかに笑っている麻弓さんがいた。

「これはやばい」

「あ、やっぱいいで…」

危険なのでこの話を終わらせようとすると椎名先輩が答えてしまった。

「空太は私の飼い主よ」

「…飼い主？」

「何言ってるんだ椎名！？？」

「空太は私の飼い主よ」

「聞こえなかったわけじゃないからね！？？」

「か、神田先輩…」

「い、いや違うんだ！これには訳があつてだな？まずはそれを聞いてから…」

「空太」

「…なんだ？」

「二人の時はましろって呼んで」

「今この状況でそれ言ったら余計ややこしくなるからやめてね！？？」

「どうやら二人は行つてるところまで行っているらしい。こんなものを見せられて麻弓さんは大丈夫なのだろうか、そう思った矢先肩を優しく叩かれた。

「恐る恐る振り返ると麻弓さんが何故か憐れむような目で俺を見ていた。」

「まあなんだ、うさ…一年しか歳が変わらないのにこんなに大差つけられて辛いのもわかるが、その…元気出せよ？」

「おいどういう意味だ」

「お前は寂しく一人エロ、神田は楽しくペットとエロ」

「韻踏んでんじゃねえ!?!」

「ちよっ!?!? 違えますからね!!? 俺としい「二人の時はましろ」…ま、ましろはそんな関係じゃ…!」

「神田君…不潔…」

「…うさくん近寄らないで」

「「違うんだー!?!?!」

「お腹空いたわ」

河合荘に二人の男子が悲痛で泣き、誰かのお腹が可愛らしくクウと鳴いた。

さくら荘 side おたから

誤解を解けぬまま青山は河合荘の管理人である住子さんの手伝いに行ってしまう、美咲先輩と仁さんもそれに続くように居間から出ていった。

「ちよっ!? だから違うんですって先輩!」

「うさくんも男の子だもんね」

「女子から言われて傷つく台詞ベすと8に入る事を言われるなんて! 羨ましいようさ君!」

「あんたはちよっど黙っとれい!!!」

河合先輩に精神的ダメージを受けたうさ君に何故かシロさんが羨ましそうにしている。

それを見て俺は思わずうさ君に共感してしまった。

(ああ……いつも苦労してるんだな)と。

「そんな苦労してるんだなって同情するような目で見ないで!」

どうやら顔に出ているらしく、それが余計にうさ君にダメージを負わせたらしい。申し訳ない。

ふと視線を外し赤坂達の方へ向けるとなにやら不穏な空気が流れていた。

「やだ〜可愛い〜。こんなに可愛いのにゲーム作れるなんて彩花尊敬しちゃうな〜、メアドとか交換しない?」

「結構ですよ? 龍之介には私がいいますから、それに龍之介があなたなんかには返信しませんよ。どうせメイドちゃんに阻まれて終わりですから」

「私〜、そういう器用な人って素敵だと思うんだよね〜年下も可愛いみたいな?」

「あら、それは自身が素敵だと言ってるんですか? そんなゴテゴテのメイクして、女の顔はキャンパスと言いますがあなたの場合土木建築でしょう?」

「うえ〜ん、なんだかこの人怖い。赤坂くん助けて〜:誰が土木

建築だこの無駄乳(ボソツ)」

「そこからは近寄らないでくださいね?ここから先は私しか入れない龍之介のパーソナルスペースですので、後、自身にないモノを人が持つてゐるからって妬むのは心の汚さの表れですよ?慎ましくてもいいんじゃないですか、パッドでも」

バチバチと言うよりはギスギスしている。龍之介が助けろと俺に視線を送ってくるがそつと視線をズラした。

「おいおい…なんだあいつら…女って生き物はなんでこんなにこわいんだよ…」

麻弓さんがそう言って二人にドン引きしている。

「なあ神田。メイドちゃんってなんだ?あの陰気そうな奴もしかして金持ちとか?」

「いえ、赤坂がつくった自動メール返信システムのことです。ちよつと待ってくださいね…」

麻弓さんがそう聞いてきたので俺は自分の携帯を取り出してそれを見せる。

「ほら」

『どうも初めまして!龍之介様に開発してもらった天才メール返信システム”メイドちゃん”です♪以後お見知り置きを〜』

それを見た麻弓さんは何故か引いていた。

「え、どうしたんですか?」

「いや、なんでわざわざメイドなの…?そういう趣味?」

そう言われるとそうだと思った。今みでは慣れすぎて当たり前だと思つていたがよくよく考えてみたらメイドである必要はなかったのではないか?

そう思い赤坂に視線を向けると睨み返されてしまった。

「どうでもいいだろう…これ以上詮索するようなら神田のPCの数学問題集のファイルを個人情報もろとも全世界に発信する」

「やめろ!というかなんでお前がファイルのこと知つてんだ!?!?」

「神田は馬鹿か?ハッキング以外に何がある?」

「サラツと当たり前のように言つてんじやねえ!?!?」

『空太様のファイルにはポニーテルとストレートロング、生足の傾向が主に見られます』

「余計なことと言わないで貰えるかな!?？」

椎名やリタからは変な視線を浴びているが、麻弓さんだけは慰めるように語りかけてくる。

「おいおい神田、そう恥ずかしがることじゃないぞ？うさの部屋なんて白付き無修正の巨乳本が山程あるんだから」

「ねえよそんなもん!？」

「え？呼んだ？」

「ああ悪い悪い、シロ付き無修正のエロ本か…うさは両刀使いだったな」

「あ、その話詳しく〜」

「違いますから！俺は普通ですので彩花さんは引つ込んでて…勝手に人の性癖決めつけるのやめてくれますか!?？後シロさんも呼んでないから引つ込んでて！」

「ちなみに俺はDSな女の子に縛られたいなあ…あ、18歳未満はNGだけどね？」

「誰もあんたの性癖なんて聞いてねえよ!?？」

「おお〜！お前ら息が合うな！ツツコミ役が二人もいるといじる方も楽しいな！」

「うさ君が二人いる感じ〜♪空太君は変処理二号だね♪主にシロさんと麻弓さんの」

「おい、今なんで私入れた？」

変処理という謎のワードが出てきた。なんだろうとうさ君に聞いてみようと思ったら真つ青な顔をして首を横に振っている。

まるで聞かないでくれと言わんばかりに。

「さくら荘の住人も変人が多いからな、それを対処するのが神田の役目だ」

赤坂が当たり前のように何か言っているが、別に俺は対処したくなくて居るわけでもなんでもない。対処しなければならぬ状況に陥るから対処しているのだ。

俺が「お前もだぞ」と赤坂に言うと言聞こえていなかったのかPCを取り出して何やら作業を始めた。それも赤坂らしいと思い、恨み半分で後はリタに任せると次は椎名が近寄ってきた。

「空太」

「ん？なんだ？」

「生足がいいの？」

「ぶふっ!??だから何言ってるんだお前は!??」

「ポニーテール…」

「いやだからその話はもう…」

「七海のこと？」

「は？なんでそこで青山が出てくるだよ？」

「…知らない」

「え？ちよつ椎名？」

「空太のバカ」

椎名はムツとしたままりタの方へ向かってしまった。

「なんなんだよ…」

「生足ねえ…」

「へ?」

ボソツと漏らした独り言に重なるように後ろから重々しい声が聞こえた。

恐る恐る後ろを見ると、そこにはエプロンをきて鍋を持った青山がいた。

「ど、どこから…?」

「数学問題集のファイル辺りかな？」

かなり前からだったらしい…なぜ気づかなかったのだろうか。

青山の笑みに段々と影が深くなっていく。

「あ、青山さん？」

「神田君…あんまこつち見んでもらえる？」

「い、いや違う…」

「変態」

「……………」

もう声にもならなかった。青山が完全に冷めきった目で見ている。

「後、ポニーテールの画像は消しといてね」

「へ？えつと…それは…」

「消、し、と、い、て、ね？」

「は、はい…」

今まで見たことも無いような青山の笑顔に俺はこくこくと首を縦に振った。

翌日、青山が赤坂に依頼して俺の数学問題集のファイルは消されていたのは別のお話だ。

食前の騒ぎ さくら荘side

皆さんは鍋奉行という言葉を知っているだろうか。

鍋の火入れ具合、具の分配、ダシの素すら一人で決めてしまい、その場を支配する者のことだ。

鍋に関しては一切手を抜かず、鍋を食べる事に全力をかけている。

そんな鍋奉行が今この場にいたらなんというだろう…今回の交流会の鍋はいささか偏りすぎているのだから。

「さあみんな食べるんだもーん！」

上井草先輩がいつから作っていたのかわからないくす玉を盛大に開けて賑やかな破裂音が河合荘に響く。

くす玉の中からは『この出会いを宝に！』と書かれ、端っこにニャボロンのイラストが描かれた断幕が垂れている。

「美咲先輩…それいつ作ったんですか…？」

「河合荘に着いてから！」

「そんなわけないでしょ!?!?ここにきてまだ1時間も経ってませんよ！」

「時間なんてそんなものに私が縛れると思うのかこーはいくん！」

そうだった。この人宇宙人だった…

いや、今くす玉の事はどうでもいいのだ。それよりの問題が今俺の目の前に広がっているのだから。

「では美咲先輩、次の質問です」

「全く…こーはいくは質問ばつかだね?そんなんだから未だに宇宙人になれないんだよ?」

「常識を全て捨て切って宇宙人になるくらいなら地球人のままでいいですよ!それより何ですかこの鍋のレパートリーは！」

俺の目の前に広がる三つの鍋が異様な雰囲気を出している。

まず一つ目、キムチ鍋。キムチ特有の酸味と辛味が食欲をそそるその香りは今にもよだれが垂れそうになるほど美味しそうだ。

二つ目、トムヤムクン。キムチ鍋にも似て入るが決定的に違うのはこの複雑でありながら鼻を通るスパイシーな香りだ。この鍋も美味

しそうだ。

そして三つ目…真っ赤にグツグツと煮込まれた鍋だ。しかし、その鍋からはその赤みからは想像される辛い香りはない。むしろその逆で食べる前から分かるほど甘い匂いが漂ってくる。

「何で鍋が赤しくないんですか!??てか最後のこれ何!??」

「赤は勝負時と祝いの時に使われる色だからな。美咲が全部の鍋を赤で染めようって考えたんだ」

仁さんが苦笑いしながら説明してくれた。

「そうだよこーはいくん！赤は勝負の色だ！私の勝負パンツも赤色だぞー！」

「誰もあなたのパンツの色なんか聞いてねえ!??」

「空太」

「ん？何だ椎名？」

「私は白よ」

「ぶふっ！だからお前何を唐突に!??」

「赤と白でおめでたね」

「勘違いされるからそういうのやめようね!?それと紅白でうまいとか思ってるのか!??」

「神田くん最低」

「そういうななみんはトラ柄だよね？」

「美咲先輩!??」

「神田くんは聞かんといてー！」

「けっ、高校生が色気付きやがって」

椎名や美咲先輩が暴露大会をしている中、河合荘の住人である麻弓さんが苛だたしそうにしていた。

「こういう優等生みたいな純情っぽい奴ほど後ろでは何人男を手玉にしているからわかんねえんだ。(麻弓調べ)」

「そんな事してません！」

「もー麻弓さんったら嫉妬しちゃって、ダメだよ高校生相手に今の麻弓さんを比較しちゃ…だって、もう(笑)若くないんだし(笑笑)」

「彩加テメエー！」

この時点で薄々感じていたのだが、この彩加さんという人は少し、
というかかなりいい性格をしているようだ。

「それにー、麻弓さん下着のセンス全然無いじゃん。ほら今日だって
上下揃ってないし、上は白で下は黒」

「な!??彩加お前っ!」

「神田くん見ちゃアカン!」

突然彩加さんが麻弓さんの短パンと襟のゆるいシャツを下にずり
落とした。

一瞬だけ白いブラと黒のレースが見えた気がしたが目に激しい痛
みが出てそれどころではなくなった。

「ぎやあああああ!」

「着てるものが白と黒とか…麻弓さん、心の中はお葬式気分(笑)?」

「よしテメエは絶対許さねえ、この場でそのマスク剥ぎ取ってやる!」

「あ、青山さん。今神田くんにやった目潰し俺にもお願いします?」

「へい!りっちゃんは今日のパンツは何色だー!」

「へ!?わ、私は…」

「ちよっ!上井草先輩、先輩に何聞いてるんですか!」

「なんだ?うさは知りたく無いのか?」

「そ、それは…」

「お腹空いたわ」

「ええい!近くに寄りすぎだ居候娘!こっちに来るな!椎名のところ
に行け!」

「そんなつれないこと言わないでください。ほら、あーんしてあげま
すから」

カオスはより一層濃くなり、既にツツコミが追いつかなくなった。
俺はどうしようもないこの状況を前に思考を放棄しかけた。

すると、騒がしいなかでパンパンと、小さくもはつきりと手を叩く
音が聞こえた。

「みんな?とりあえず鍋食べましょ?鍋が冷めちゃうから。後、ご飯
を前に下着の話なんて無作法よ?わかった?」

そこには笑顔で恐らく大変キレている住子さんの姿があった。

『は、はい…』

みんなそれを察し、一度静かに席に着いた。住子さんの隣に座っていた千尋先生も呆れたようにこめかみを抑えていた。

「それじゃあ、いただきます」

住子さんがそういうと、みんなも手を合わせて声を揃えて言った。

『いただきます』

………そういえば三つ目のあの赤い鍋のことをまだ聞いていない気がした。